

講演要旨

死者への冒涇なのか、新たな宗教体験なのか ：AIによる死者／聖人の再現をめぐる

花園大学教授
師 茂樹

死者の生前のデータを用い、AIを用いて何かを語らせたり生者との対話を可能にしたりする技術が普及しつつあるが、それに対する批判も見られる。一例をあげれば、2019年のNHK「AIでよみがえる美空ひばり」では、CGや音声合成で復元された美空ひばりが秋元康作詞による新曲「あれから」を歌い、そのなかで「あなたのことをずっと見ていましたよ／頑張りましたね／さあ 私の分までまだまだ頑張ってる」と語りかけたが、それに対して「故人の言葉を創作し、自己の願いを仮託して語らせることは危険だ」「死者は生者の意思によって所有することのできない存在なのだ」（中島岳志）といった批判が出た。

一方、2020年の動画「Unfinished Votes」は、銃乱射事件で命を落とした若者を蘇らせ、銃規制派への投票をよびかけるものである。この動画は「私たちの息子が言わなければならないことを、どうか聞いてください」という遺族のメッセージから始まるが、この動画もまた「冒涇」であり、遺族が「故人の言葉を創作し、自己の願いを仮託して語らせること」として批判されるべきなのであろうか。こういった活動に対する「死者を冒涇している」といった意見もまた、生者が自己の意見を押しつけていることにはならないのだろうか。

韓国MBCの番組「あなたに会った」（2020年）では、3年前に亡くなった娘に母親がVR技術で「再会」し、再度別れを経験するというものである。制作者の発言からは、このような技術が遺影など、従来あったものの延長線上で捉えられていることがうかがえる。一方、このような技術が「追悼のプロセスを豊かにするのか、それとも壊してしまうのか、慎重に検討する必要があるのではないだろうか」（折田明子）と問題提起する声もある。新しい技術によるこういった取り組みが、追悼になるのか、ならないとしたらなぜならないのかについては、検討が必要であろう。

死者の「再現」に加え、近年では聖人・先哲の残した言葉などをAIに学習させ、生者との対話を可能にする技術も普及しつつある。日本では、京都大学が開発する「ブッダボット」や、ソクラテスとの対話を目指す名古屋大学のプロジェクト「Humanitext Antiqua」などがある。そのうち前者に対しては、「「見えないものを感じる」「もういない人と出会う」というのは、こういうことと似て非なるものはずだ」と批判する声もある。しかし、宗教史をふりかえってみれば、亡くなった聖者と出会うことを願い、あるいは奇跡が起きることによって、聖者の姿を見たり教えを受けたりする体験が記録されている。そのような体験とAIで再現された聖者たちとの「邂逅」は、何が異なるのだろうか。

新しい技術の導入によって、宗教体験が変わることはしばしば起こり得ることだが、AIをはじめとするデジタル技術は私たちと死者・聖人との関係にどのような変容をもたらすのか。幅広い立場からの議論が必要であろう